

復興ネットワーク

「逃げない被災者」の存在

「逃げない被災者」が防災関係者の頭を悩ませている。

異常気象による集中豪雨の常態化、近づく海溝型地震に伴う津波災害。いずれも一刻も早く安全な場所へ逃げることで生死を分けることになる。ところが、逃げ遅れではなく、逃げないことを選択する人たちもいるのだ。

「日本人には危機管理のDNAが欠けている」と言ったのは著名な軍事アナリストだ。農耕民族は自然に立ち向かうより、自然に寄り添う習性がある、とも言われる。だが、背景には日本社会の構造的な劣化があるように思えてならない。

逃げる決断をしてから、30分以内に行動へ移せた人は約

関西学院大学災害復興制度研究所教授

山中 茂樹さん(60)

2割という調査結果がある。高齢化社会である。地域における「防災の瞬発力」は確実に衰えている。津波の予想地域では、逃げようとして周りに迷惑をかけるより、座して死を待つというお年寄りもいる。

東海地方では、ボランティアクループによる登録高齢者の避難を支援する試みが始まっている。ところが一昨年、長野県では有線電話帳から独居老人を捜し出し、殺して回った犯罪者がいた。独り暮らしだからと救援を求めることさえはばかれるご時世だ。

一方、昨年の梅雨期、逃げ遅れる高齢者や障害者のために「避難準備情報」が初めて出された。しかし、新潟県の

ハンデイのある人たちがこれを拒む声明を出し、ボランティア団体などが賛同する事態となった。「避難所の非人間的環境に耐えられない」というのが理由だった。

土地の災害履歴を知らず、自然をなめてかかる人たちがいる。「避難指示に従って家具を駄目にするより、逃げずに2階へ揚げた方がいい。水が引いて泥が乾いた後より、水の引き際に洗った方がよく落ちる」と言ってはばからな

い「逃げない被災者」の事例も報告されている。

先月22日、私も議論に加わった政府の「洪水等に関する防災用語改善検討会」が提言を発表した。氾濫発生の危険度を3段階に分けるなど、防災情報避難行動に直結するよう危険レベルや用語の改善を盛り込んでいる。

とはいえ、地域力の劣化を防災努力だけで補正するには無理がある。一人ひとりが災害だけでなく、日常に潜む危険に敏感になること。まずは家庭の危機管理能力を高めることから始めなければいけないのだろう。

やまなか・しげき 大
阪府生まれ。朝日新聞神戸支局次長の時、阪神大震災に遭う。以降、災害を主なテーマに取材を続ける。 泉阪神・淡路大

震災国際検証会議オプザバーなどを歴任し、05年4月から現職。著書に「震災とメディア」復興報道の視点」がある。